ピカイチ先生の
生活経営セミナー

2017年08月
現場で考える資産運用
（③ 資産を創る）

ネクストライフ・コンサルティング
〒975-0038
福島県南相馬市原町区日の出町167-3
info@next-life-consult.com
ピカイチ先生　検索

ピカイチ先生

ある歯科医院の現状

今後のメンテナンスについてのお詫びとお願い

●現状の問題点
歯科衛生士が減少。
メンテナンスの現状維持は不可。

●対策
メンテナンスの内容を変更（時短）。
メンテナンスの間隔を延長（頻度削減）。

●今後の対応
①一般の方
・内容の変更：60分間 → 30分間
・間隔の延長：6ヶ月毎 → 8ヶ月毎

②当院でインプラント・矯正治療された方
・現状のまま

生活密着の業界
共通の問題

お金があっても
診てもらえない

差別化して
現状維持

トヨタ生産方式（ＴＰＳ）における資産とは？

ただ、既存の会計（財務会計・管理会計）では、コンセプトや設計情報、ノウハウのような無形資産は「価値ある」資産として勘定する仕組みがない。

財務会計では帳簿上、有形の材料・有形の仕掛品は「資産」勘定、完成した製品はもちろん「資産」勘定となる。一方、無形の設計情報やコンセプト情報は帳簿上は資産として勘定していない。製品開発はプロセスで費用が発生するだけの経費として扱ってきた。

（中略）

（われわれが使っている財務会計では）材料・仕掛品・製品在庫は、帳簿上では大事な「資産」として勘定する。しかし、TPSが世界の常識となっているいま、実務的には、（中略）設計情報の質が悪ければ、材料・仕掛品・製品在庫は存在してはいけないものになっている。

TPSに基づく現在のものづくりでは、財務会計上では「資産」である、材料・仕掛品・製品在庫は、実務上「負債」と見なすのが常識である。ムダな材料を仕入れて売れないモノを作れば、企業の経済的な損失が増えるからである。（中略）モノがあふれる現在、有形の材料・仕掛品・製品は会計士・税理士的には帳簿上「資産」であっても実務上、実際のビジネスでは「負債」として扱う。

「トヨタの強さの秘密」（酒井 崇男）より

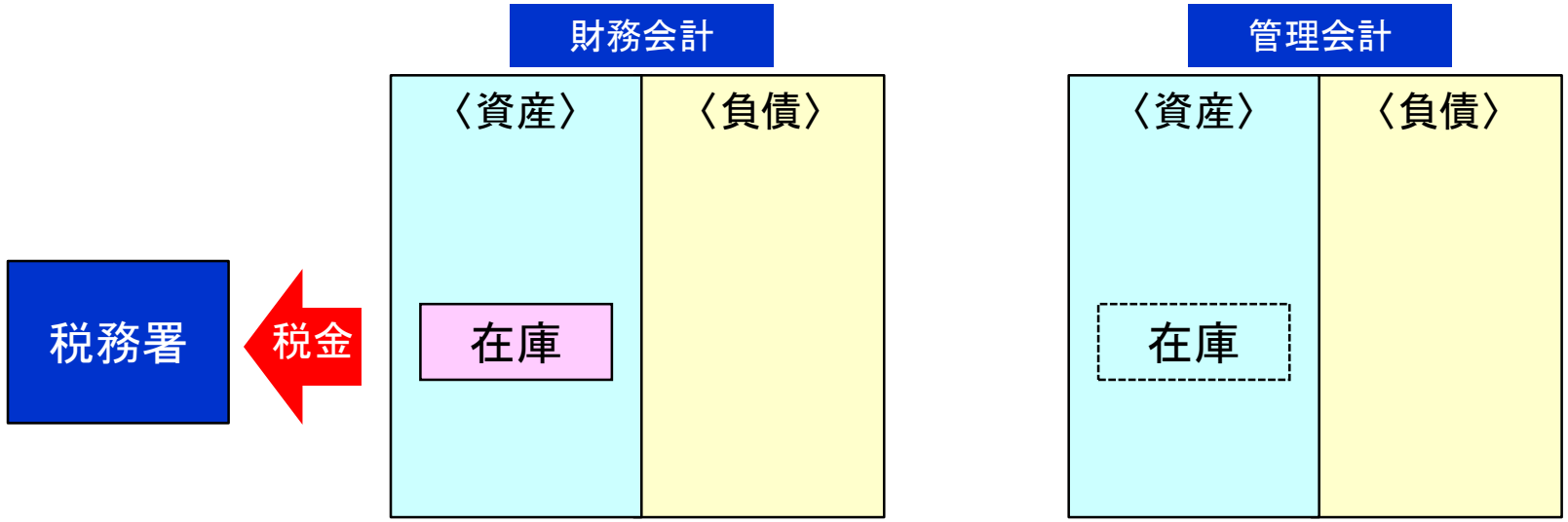
資産とは？

【言葉の定義】
●[資産]とは、[お金]を生むモノ
●[負債]とは、[お金]を失くすモノ

①私の[資産]は、誰かの[負債]
②私の[負債]は、誰かの[資産]
③私の[資産]と誰かの[負債]は、同額となる

それは、
誰にとって「資産」なのか？

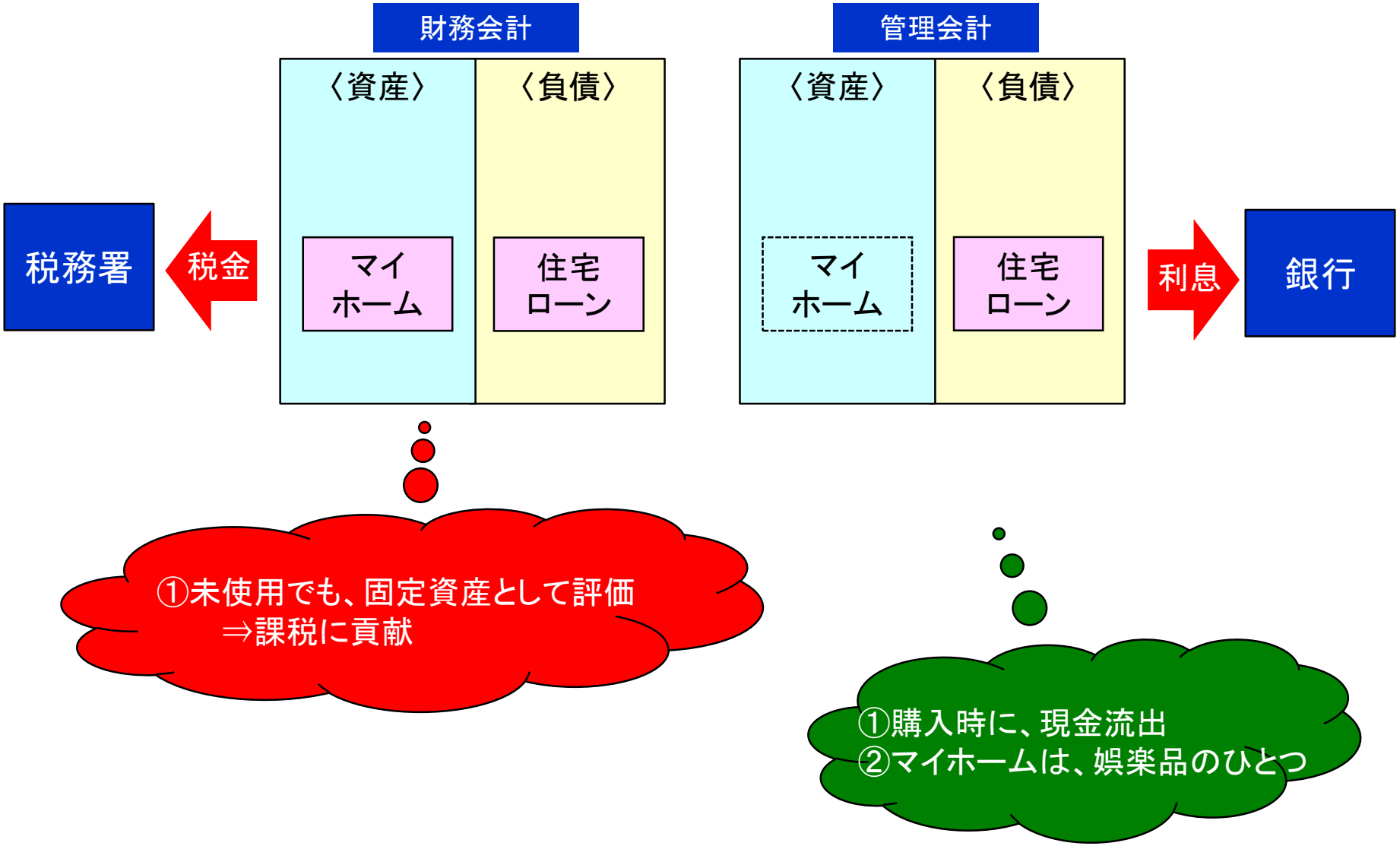
有形資産「在庫」は、誰の資産？



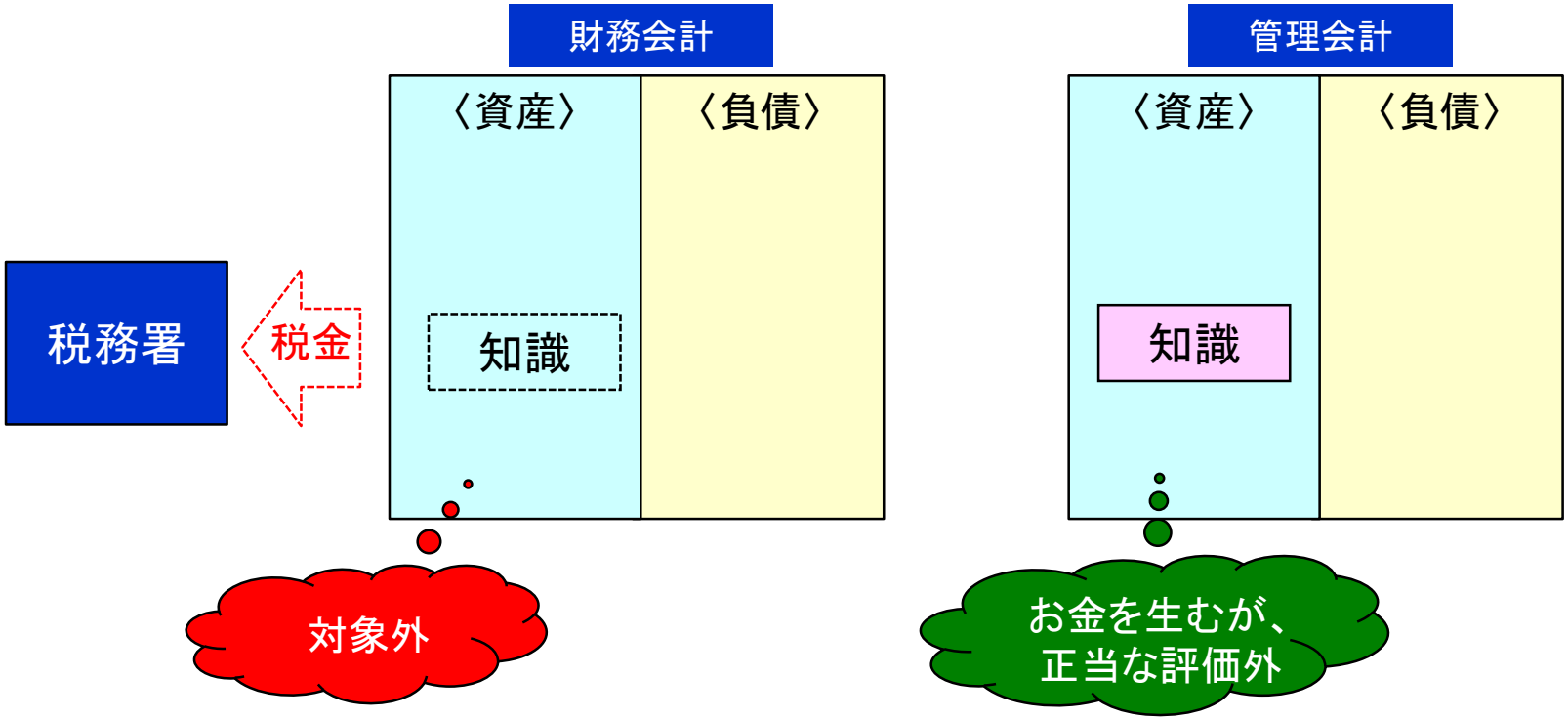
①売れるまで、費用に計上できない
②不良在庫（ゴミ）も、資産と評価（仕入れ値）
⇒利益に貢献　⇒課税に貢献

①仕入時に、現金流出
②不良在庫（ゴミ）は、無価値

有形資産「マイホーム」は、誰の資産？



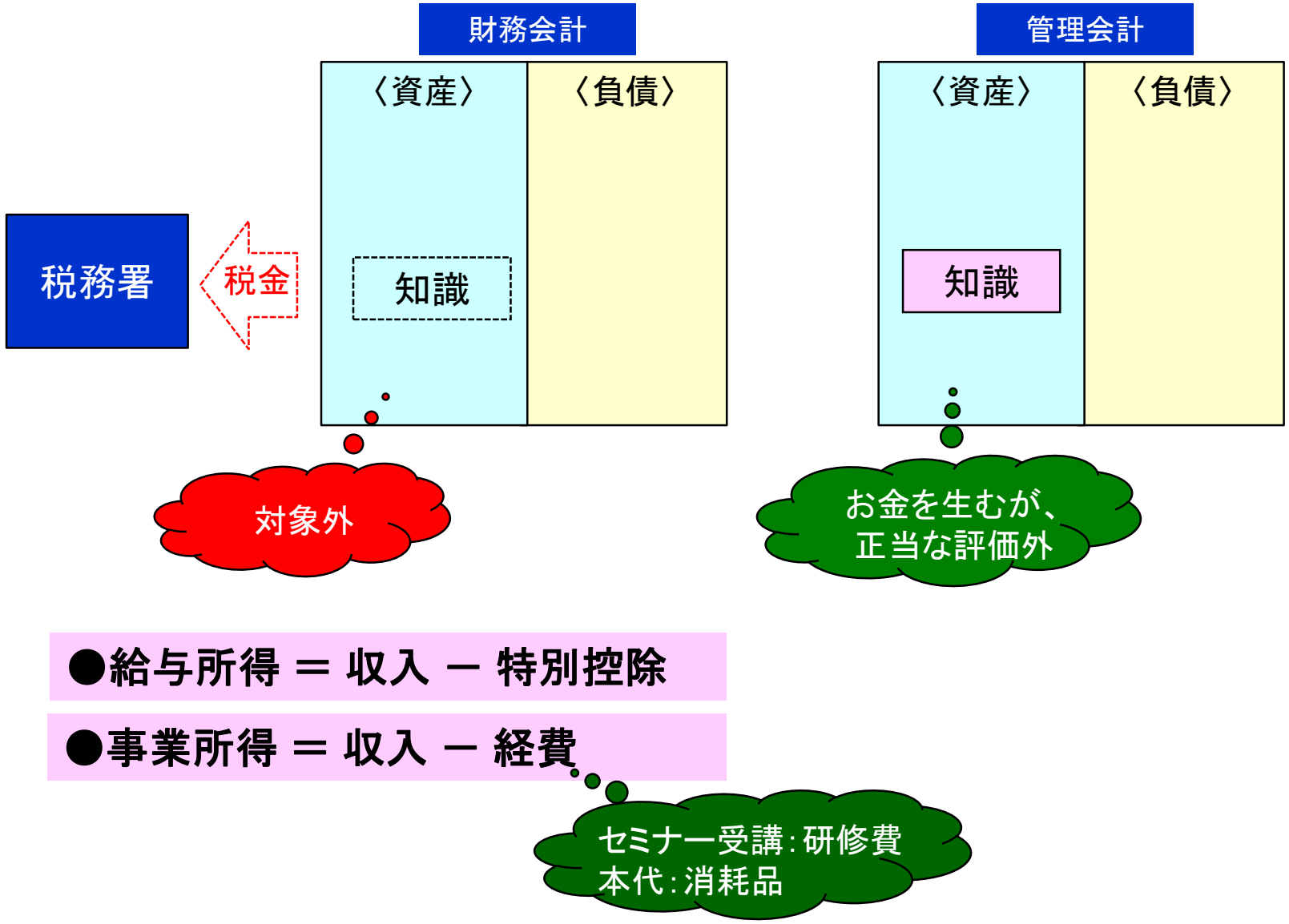
無形資産「知識」の会計処理



収益 ＝ 収入 － 経費

セミナー受講：研修費
本代：消耗品

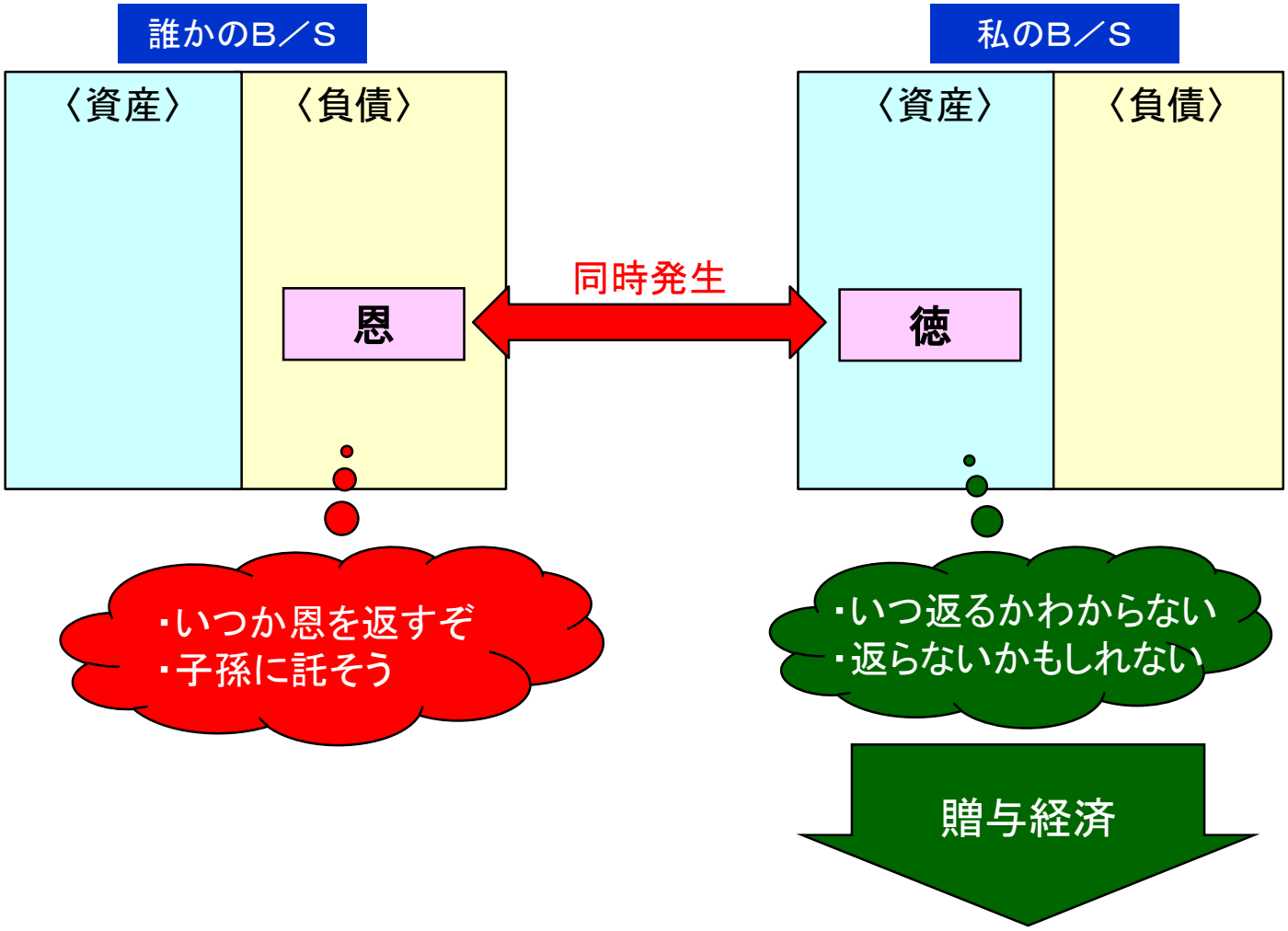
無形資産「知識」の家計処理



●給与所得 ＝ 収入 － 特別控除

●事業所得 ＝ 収入 － 経費

無形資産への投資とは？


誰かのB／S
〈資産〉
〈負債〉
恩
同時発生
私のB／S
〈資産〉
〈負債〉
徳
・いつか恩を返すぞ
・子孫に託そう
・いつ返るかわからない
・返らないかもしれない
贈与経済

これからは、無形資産の時代（1/2）

財務会計に出てくる「人間」は、人材のハタラキの質や種類にかかわらず、どれも同じ人件費という「費用」の勘定科目のみである。管理会計に登場する「人材」も、工場で働く人の人件費かオフィスで働く人件費としてしか把握されない。あるいは、正社員は固定費で、派遣は変動費くらいのものである。いずれもそのハタラキにかかわらず、財務諸表で人間は「費用」でしかない。

「弊社は人材こそ最大の資産だと考えています。つまり人財です」などと言っておきながら、リストラするときには費用の高い順、つまり給料の高い順に機械的に解雇していく。

その都度、都合のよいように人材は扱われてきたわけである。あるときは資産、あるときは単なる費用として扱われてきたということである。

（次頁につづく）

「タレントの時代」（酒井 崇男）より

これからは、無形資産の時代（2/2）

あるいは、人材を資産だと言ってみても、何をもって資産と言っているのか、きちんと説明されてこなかった。資産である人材は何を生み出しているから資産なのか、きちんと説明されてこなかった。資産である人材は何を生み出しているから資産なのか、といった答えはイメージではわかっていてもその都度明確には説明されてこなかった。

実はこうした事情は、会計だけではなく、経済学でも経営学でも同じである。そもそも、これらの分野では、人間の労働に関しては19世紀で時間が止まっている。つまり人間が労働を通して生み出す価値の質的な側面については、最初から考慮されていないのである。

「タレントの時代」（酒井 崇男）より